

熊本県立大学創立60周年記念シンポジウム 冬・進歩・・・大学と社会

第4回文学部フォーラム あなたの「ことば」が失われるとき —失語症と大学での言語研究—

フォーラム開催にあたって 村尾治彦（熊本県立大学准教授）

第4回文学部フォーラムは「熊本県立大学創立60周年記念シンポジウム—冬・進歩—」の中での開催となった。シンポジウム全体のテーマが「大学と社会」であることから、文学部の研究においてキーワードとなる「ことば」に焦点をあてて、社会で問題となっている失語症と大学での言語研究の接点を求めて、言語聴覚障害、言語学、日本語教育の各分野から発表が行われた。

ことばに関わる職業に就いている人やことばについて某かの勉強をしている人を除けば、我々は、普段自分が使っていることばをほとんど意識することがない。ことばは、人種、性別、生まれた国、文化の違いに関係なく、誰でも特に苦勞することもなく獲得できるものである。ことばはヒトという種にとって当たり前の存在であるが、一度失えば日常生活さえままならなくなる。例えば、言葉を一切使わずに自分の考えを誰かに伝えようとした場合、ジェスチャーである程度伝えられることはあるかもしれない。しかし自分の意思を伝えるのがいかに困難であるか分かる。あるいは、なじみのない言語をつかう国に突然連れて行かれたことを想像してみよう。そこで生きていくため



左より村尾（司会）・小園・馬場・中村・石山・西川の各氏

にその国の人たちが話していることを理解しようとする。あるいは自分の考えや願望などを伝えようとしてみる。トイレの場所や食べ物を手に入れる方法など日常生活においてごく基本的なことでもさえいかに難しいか想像がつくだろう。思考

能力はしっかりしているのに、意思疎通ができない。ことばを失うとはそのような状態のことなのである。ことばは失ってみて初めてその存在の大切さに気づく、まさに空気のような存在なのである。

フォーラムでは、ことばを失うとはどういう事か、失語症とよばれるもののメカニズムや症例などの失語症の基本的話に始まり、大学での言語研究の紹介や日本語教育と失語症訓練の接点、学生による調査報告が行われた後、大学の言語研究が失語症研究や治療、訓練にどう貢献していける可能性があるのかについて討論が行われた。

まず、熊本県言語聴覚士会会長であり、熊本機能病院に勤務の言語聴覚士、小菌真知子氏からは、「失語症を通して見えるもの」と題して、失語症の原因やメカニズム、症例、言語聴覚士の仕事および失語症者のことばを失った時の苦しみなどが紹介された。続いて、熊本県立大学の村尾治彦が認知言語学の立場から大学での言語研究について紹介した後、文学部学生から、失語症者のことばの理解度についての調査報告が行われた。熊本県立大学の馬場良二教授からは、失語症者とことばの通じない外国人との共通点



失語症についての想いを語る文学部三年生 中村美美さん

に注目し、失語症者の言語訓練と日本語教育における教授法の接点についての話があった。

各発表の詳細については、以下の各自の稿に譲ることとする。

言葉が失われるということ ～失語症の臨床から～

小園真知子（熊本県言語聴覚士会会長）

はじめに

日常生活において「ことば」は空気や水のように、ことさら意識されることもなく存在している。

朝起きて「おはよう」と挨拶する、新聞を読む、ニュースを聞く、電話をする、そんな日常のことが、突然できなくなる日が来るなど誰も想像していない。



ところが、健全な言語能力を持っている人でも、脳卒中や頭部外傷によって起こる「失語症」は、いつ襲いかかってくるかわからないのである。言葉のない生活など考えられないが、そのような世界に突然放り込まれた人はどのように感じ、どのように自分をその世界に適応させていくのだろうか。

ある80代の女性は失語症で全く言葉が出なくなった後、少しずつ回復してきたときのことを次のような五行歌に詠んでいる。

おはようの一言が
ありがとうのひと言が
たまらなく嬉しい
明日はなんと言葉が出るかしら
楽しみだ

「失語症」という、外界との意思疎通手段を奪われた人の経験を通して、人間にとっての言葉、人とのコミュニケーションの重要性について考えてみたい。

言語機能の獲得と喪失

人間の言語機能の複雑さは動物のコミュニケーションとは比べものにならないが、言語の獲得は聞く能力の発達から始まる。母体内にいる胎児には、障子1枚隔てたくらいの音量で外界の音が聞こえており、生後間もない時期から母国語とそれ以外の言語音に対する脳の反応は異なるという研究結果がある。

子供は生活の中で繰り返される言葉を聞いて理解力を高め、言語学習の土台作りをする。「言葉のシャワー」といわれるように、愛情ある豊かな言語環境で育てられる子供とそうでない場合では言語発達に差が生じることが多い。理解語彙が増えていくと、よく使う発音しやすい語から模倣が始まる。

このような言語発達のメカニズムは、われわれが母国語以外の言語を学習する場合にも通じ、さらに失語症の人が言葉を取り戻す過程にも共通する部分があるといえる。

言語の表出過程

通常の会話では、考えることと話すことは同時に進行しているように感じられる。しかし、実際には、①対象を認知する、②対象を表わす語を脳内辞書から選び出す、③発音のための構音器官の運動をプログラムする、④実際に構音器官を動かし発音する、という一連の働きが一瞬で起こっているのである。

たとえば果物を見て「りんご」と発音するまでには次のような過程がある。

<表出過程>

<障害>

対象を認知する

形、色、意味など記憶と照合し認知する

認知障害

↓

語を選択する

脳内の辞書から「りんご」という語を選ぶ

失語症

↓

発音をプログラムする

「リ」「ン」「ゴ」の発音操作の指令をだす

発語失行

↓

発音する

「リンゴ」と声に出して言う

構音障害

失語症は、対象を認知し、イメージは浮かんでいるにもかかわらず、それを言語という記号に置き換えて表現することができなくなる障害である。

これは健常者でも時に経験する「度忘れ」の状態にも似ているが、失語症では自

分や家族の名前という基本的なものすら自由に出なくなり、表出できない語の量と頻度が病的に多い。患者はよく喉元を指して、「ここまできているのだが…」というような表現をし、言いたいイメージはあるのに語が想起できないことを伝えようとする。

ある失語症者は言葉が思い通り出ない症状について、「言葉の引出しがゴチャゴチャになってしまったようだ。本来あるべきところに必要な言葉がなく、うまく見つけられない状態だった」と表現している。

大脳にある言語中枢

失語症は、脳の言語中枢が損傷されたことによって起こる後天的な言語機能の障害で、「聴く」「話す」「読む」「書く」という全ての言語領域に影響がおよぶ。

右利きの人のうち97%の人は、左の大脳半球に言語中枢がある。図は左大脳半球を左側面から見たものである。左から前頭葉にある言語表出の中枢であるブローカ野、右が側頭葉にある言語理解の中枢のウェルニッケ野である。言語中枢には言語機能に特異的な細胞が集まっているので、どの部分がどの程度の広さで損傷を受けたかによって失語症状や重症度が異なってくる。



失語症の症状

失語症は、「外から見えない脳の言語中枢の障害」、「言語そのものが形として捉えにくい」などの理由で、初めて失語症者に接する人には不可解とも映る症状が現われる。

言語症状としては、「耳は聞こえているのに言葉の意味が理解できない」、「口は動くのに正しく話せない」、「目は見えるのに文字が読めない」、「手は動くのに文字が書けない」というものが特徴的である。全体像としては、簡単な言葉が通じないにもかかわらず、状況判断はよく礼節も保たれていて、記号としての言語機能のみが特異的に低下している状態である。

【聞き取りの障害】

文が長くなるほど聞き取りが難しいのは外国語でも同じであるが、失語症では「眼を閉じてください」などの具体的な指示の文よりも、仮名一文字など音韻を聞き分ける課題のほうが短くても難しいことが少なくない。ある患者は、「電話の聞き取りは苦手ですが、相手が誰かが分かるととたんに話の内容が分かるんです」と自分の経験を報告した。これは相手が特定されることで話の内容が限定され、それまでの経験から相手の発話を予測しやすいためであろう。このようなことから、言語の聞き取り能力には音韻以外の文脈や記憶、視覚的情報などさまざまな要素が関与していると思われる。

【話すことの障害】

ほとんどの失語症者に認められる表出の障害は、^{かんご こんなん}喚語困難という名詞が想起できない症状である。日常の応答では失語症と気づかれないほど流暢に話せる場合でも、目的の語が自由に出ないという悩みを持つ患者は多い。表出の誤りとしては、「めがね」が「ミダコ」など全く違う音韻の羅列になるもの（^{おんいんせいさくご}音韻性錯語）、「めがね」が「トケイ」など他の意味の語に置き換わるもの（^{いみせいさくご}意味性錯語）などがある。失語症が重症になると意味不明の語の羅列（ジャーゴン）になるが、表情や声の抑揚などの非言語的コミュニケーションは保たれていることが多い。ある患者は、唯一表出可能な「ヨー」の音に抑揚をつけて感情を表現していた。

【文字の読み書きの障害】

失語症でよく誤解されるのが、文字の読み書きの障害である。一般的に「かな」のほうが「漢字」より易しいと思われているが、失語症者は表音文字である「かな」よりも、表意文字である「漢字」のほうが意味を理解しやすい。失語症があっても、本人に関係のある漢字や新聞の見出しなどは理解可能な場合が多い。

失語症は言語記号全般の障害なので、話し言葉の代償手段として、五十音表やコンピューターのキーボードを使うことは難しい。ましてや手話などそれまで使ったことのない言語記号を使うことは、失語症でない人でも容易なことではない。

一般的に文字言語の習得には意図的な反復学習が必要であるため、失語症の場合、音声言語よりも文字言語の障害のほうが重症である場合が少なくない。脳の損傷部位によっては、話し言葉にはほとんど支障がないのに、文字言語だけ特異的に障害される純粹失読といわれる障害があり、自分で書いた文字さえも読めないという症状が起こる。

失語症を持つ人の心理

失語症の原因の90%以上は脳血管障害であり、ほとんどの場合が突然の発症である。それまで、何の不自由もなく言語生活をしてきた人でもいったん脳が損傷されると、それまで培ってきた言葉を操作する能力が一瞬で失われてしまう。

英語の通訳者であった20代のある女性は、脳の血管の病気から失語症を経験し、深い苦悩の数年を経て日常生活には不自由しないまでに回復した。発症時からの日々を振り返り、「失語症からの卒業論文」と題して次のような手記を書いている。

『突然言葉を失った。今までと変わらず、意見、感情、経験はそのままあるのに、それを伝えられない。言葉がないから、頭の中で考えたりすることもできない。感じるだけ。自分がよく分らないという恐怖がある。言葉で吐き出せない思いは、時には涙になり、怒りになり夫に当たった。

—中略—

失語症を乗り越えていくということは、言葉を回復することだけでなく、言葉の障害を持っている自分をも受け入れることだと思います。今、私は私が好きです。言葉を失うことで、そう、まるで生まれ変わったように。言葉が不自由でも、私を私のままに受け入れてくれた友人、家族、夫。いつも心の支えでいてくれてありがとう。』

言葉を失うということは、単に伝達ができずに不便というレベルのものではなく、自己の存在そのものを揺るがすアイデンティティの喪失ともいえるであろう。

言葉を失ってはじめて言葉の大切さに気づくというが、失語症からの回復は容易ではなく、言葉のない世界で一生を過ごしていく人も少なくないのである。

失語症から回復した人々の手記や談話には、失語症になった方々を理解し、適切な支援をするための重要なメッセージが込められている。

言語聴覚士の仕事

言語聴覚士とは、「音声機能、言語機能又は聴覚に障害のある者についてその機能の維持向上を図るため、言語訓練その他の訓練、これに必要な検査及び助言、指導その他の援助を行うことを業とする者をいう。」と平成10年9月1日に施行された『言語聴覚士法』に明記されている。

現在、熊本県には約200名の言語聴覚士がおり、病院、難聴児施設、身体障害児者施設、高齢者施設、学校、幼稚園・保育園など幅広い領域で働いている。

言語や聴力の機能回復訓練を必要とする人は小児から高齢者まで全国で500万～600万人ともいわれ、まだまだ言語聴覚士の数が不足しているのが現状である。社会全体の理解を深めることが、言語聴覚障害を持つ方々のコミュニケーション環境を整えることにつながるので今後も啓発活動を積極的に行っていきたい。

《言語聴覚障害を持つ人が、いつでも必要なときに、自宅のそばでリハビリを受けられる熊本》が実現するよう、情熱を持って言語聴覚療法に取り組む人が増え、一人でも多くの言語聴覚障害を持つ方々が救われることを願っている。

お天気が続いて
幸せを感じる
ことばが出る
文章が書ける
幸せを感じる

ことばの認知的研究と失語症

村尾治彦（認知言語学）

1. はじめに

「ことば」はいったい何を表しているのか。簡単なようで難しいこの問いに「認知言語学」は次のように答える。ことばは、我々人間の外界の把握の仕方を映し出している。すなわち、カテゴリー化、スキーマ化、推論、比較、知覚のメカニズム等、人間の認知機能に基づいて外部世界を認知する過程を経て、混沌としたこの世界に主体的に意味づけをし、それをことばによって表すのである。以下では、認



知言語学の立場からことばというものの特性について考え、その後、認知言語学のような言語研究が失語症とどう関わり、失語症研究や失語症者の言語訓練などにどのような形で貢献していける可能性があるのかについて考えていくこととする。

2. ことばは虚構の産物？

実際に動きのないものに対して脳が勝手に動きがあるかのように判断することがよくある。例えば、次の図1の左側のように正方形と長方形を一瞬で切り替えたととき、我々は正方形が変化して長方形になったと感ずることがある。つまり、右側の図のように正方形が実際に変化しているのと同じように変化したと感ずるのである。



Jancke, D. et al. (2004:423)

図1：四角形と長方形による視覚のトリック

このような経験は日常的によくある。しかし、なぜ我々はこのように解釈してしまうのか。英科学誌 *Nature* (428:423-426, 2004) に発表された論文で、正方形と長方形を一瞬で切り替えた時、つまり実際に変化していない時と、正方形が長方形に実際に変化する時とで、脳の同じ部位が活動しているという動物実験の報告がなされている。

このような視覚のトリックの例は枚挙にいとまがないが、こうした事から言えるのは、人間は外界をそのまま忠実に捉えていないことがままたあるということである。実は、ことばもそうである。多くの人は目の前で起こっていること、現実世界のことを客観的にそのまま言葉に表していると思っているかもしれないが、ほとんどは人間の脳が解釈しなおしたものを表していると言える。少なくとも先述の認知言語学的言語観から言えばそういうことになる。先ほどの視覚のトリックのように、実際に動きのない事柄を動きのあることを表す表現形式で表すことがよくあるのである。例えば次の (1) ~ (3) の例を見てみよう。

- (1) a. (部屋に入ったときに) あっ、大切な花瓶が割れている！
b. 羊の蹄は、馬と違って二つに割れている。
- (2) a. 暗くなってきたので虫がたくさん電柱に集まっている。
b. 古い家が集まっているヨーロッパの街
- (3) a. 男の人が運動場を走っている。
b. 地震によって家の壁の至る所に亀裂が走っている。

各番号の a と b の対において、各 a は実際に変化ないしは動きがある事象を表している。例えば (1a) では、もともと割れていなかった花瓶が割れてしまった状態にあることを意味している。「割れる」という動詞は本来、割れてない状態のものが状態変化を起こして割れた状態になることを表すので、(1a) の表現形式を取ることは至極当然のことと言える。(2a) (3a) についても同様である。それに対し各 b の例では、同じ動詞が変化や動きを見せていない事象に対して同様に使われている。例えば、(1b) では、羊の蹄は元々二股になっている構造をしており、二つに割れて変化したものではない。(2b) にしても、古い家があちこちからたくさん移動してきて一カ所に集まった訳ではない。(3c) も基本的には同様である。このことはよく考えてみれば不思議なことである。我々が外部世

界の事柄をそのまま客観的にことばに映し出していないことをよく表した例である。

この現象に対して認知言語学では次のように説明する。例えば（1b）では、問題となっているひつじの蹄を捉える時、より標準的な（我々に馴染み深い）馬の蹄が同時に想起され、それと比較される。その比較過程において、心的に両者が瞬間的に切り替えられることで変化したと感じられる。¹ 無論このような過程を我々は意識したりすることはない。これは、先ほどの四角形と長方形の入れ替えの時に実際に動きがない錯覚でものを捉える時と実際に動きのあるものを捉える時で脳の同じ部位が活動するということと同じ事がここでも起こっているのではないかと思われる。² 一度脳が両者を同じものとして解釈してしまえば、それを表す言語表現が同じ形式を取っても不思議ではないだろうと思われる。

次の例もことばが外界の事柄を客観的にそのまま映し出していないということを示す例である。（4）の例は、（1）～（3）の例のような動きのない事象を動きを表す形式で表現するものではないが、外界の事柄を客観的に映し出しているとは言えない例である。

（4） あんな汚い商売からは足を洗ったよ。

これは比喩の一種であるいわゆるメタファーの例である。ここでは、「足を洗う」というのが文字通り足の汚れを取り除くことを意味しているのではなく、「好ましくないことから離れる」という意味で使われている。外部世界には、好ましくないことから離れるという事象の中に足の汚れを取るなど客観的には存在していない。「好ましくないことから離れる」と「足の汚れを取る」という事柄に共通した特性を認め、「足の汚れを取る」が持つ特性を通して「好ましくないことから離れる」という事柄を捉えているのである。

（4）のような、いかにも比喩らしい、慣用的なメタファー表現の場合は、外部世界の出来事をそのまま映し出してないと言うのは当然だろうと思われるだろうが、メタファーはごく日常的な、比喩とは感じられないような表現にも偏在する。（5）～（7）の例を考えてみよう。

- (5) 先生に言われたことに納得がいかず不満をこぼした。
(6) 先月に比べ15%給料が上がった。
(7) 会議では、雑談ばかりで議論があまり進まなかった。

(5) では、不満を述べるという言語活動を液体の特性に見立てて表現している。「こぼす」は本来液体を容器の外に出してしまうことを表すが、外部世界において、ことばが容器の外に出ることなど客観的には存在しない。ことばを液体に見立てて、あくまで不満の言葉を発することをそのように人間が捉えているのである。(6) においても、特に変わった表現のように見えないが、「上がる」というのは本来、ものが物理的に上方向に移動することを捉えて使う表現であるが、ここでは給料(の額)のような量が増加することを表している。外界において、お金の量が上方向に物理的に移動することはあり得ない。(7) についても同様に、「進む」という本来、人や車のような可動物が前方向に移動することを表す形式が「議論」という抽象的な事象に使われている。我々は、議論の特性の中に見られる、目的(結論)に向かって言葉のやりとりが展開していくことを、人や車がある目的地に向かって移動することのように捉えているのである。

今度は次のような例を見てみよう。

- (8) 僕は太郎の引っ越しに手を貸した。

(8) において、「手」は体から取り外して貸し借りできるようなものではない。ここでは、労力として貸すのは手だけではなく、体全体である。体全体を労力として貸すことによって「手を貸す」が「手伝う」という意味に転じている。ここで起こっていることは、「手」が指すものがそれと部分全体の関係にある体にならされていることである。部分と全体は互いに切っても切れない密接な関係にある。このようなものとの密接な関係を「近接関係」と呼ぶと、2つのものの間の近接関係に基づいて指すものが一方から他方へずれる現象をメトニミーと言う。³ メトニミーも一種の比喩であるが、ことばが外界の出来事をそのまま客観的に映し出していないことを示す例である。

(8) の例は慣用的なより比喩らしく見えるメトニミー表現だが、メトニミーにもそれとは感じられない、ごく日常的な表現がある。

(9) 昨夜は冷えたから、うちで鍋を食べたよ。

(10) 誕生日のケーキの蝋燭を吹き消した。

(9) では、「鍋」は中身の鍋料理を指し、「容器」と「中身」という近接関係における指示のずれを示し、(10) では、「蝋燭」はその一部の炎を指す。(9) (10) の表す意味は共に、外部世界にあるものを客観的にそのまま映し出しているものではない。

ことばが人間の外界を把握する仕方を反映するという見方は、比喻表現だから言えるという訳ではない。比喻以外の通常の表現でさえそうである。言語表現全てにおいて多かれ少なかれ、そのような見方ができる。例えば、「太陽は東から昇る。」という単純な文においても、外界に客観的にそのような太陽の動きが存在するのではなく、あくまで我々人間がそのように捉え直しているわけである。これは、我々の視覚機能を含めた認知機能や、二足で立ち、通常頭が上にある状態で過ごすという身体性に支えられた結果であり、もし人間が今と全く異なった身体構造をしていたり、逆立ちで立って生活する生物であれば、この世界の見え方は全く違ったものになり、それを表す表現も違ったものになるであろう。

さらに、もっと身近な例を取り上げると、単に若い男性が歩いているのを描写する場合でも、「人が歩いている」や、もっと具体的に「男の人が歩いている」「若い男の人が歩いている」「若い男の人が急いで歩いている」のように、同じ状況でもどの程度詳細に述べるかに関して様々な表現形式が取れる。つまり、カメラでズームイン、ズームアウトしてどこかに焦点を合わせて像を映し出すように、人間には同じ状況であってもより大ざっぱに捉えたり、より精密に捉えたりと様々な解像度で物事を捉える認知能力がある。上記の例において、男の人が歩いている単純な状況でも、それをそっくりそのまま客観的にことばに映し出すことはできず、必ずどこかに焦点を当てて主体的に描写せざるを得ないのである。この点においてやはりことばはどのような場合であっても人間の外界の把握の仕方を反映したものであるということが言えよう。

最後に文法的機能の高い言語要素についても同様のことが言えることを見ていくことにする。文中に現れる要素間の文法関係を表す助詞のような機能語と呼ばれるものでも人間の外界に対する把握の仕方が反映されている。ここでは、助詞の中でデに焦点を当てて具体的に説明してみよう。デには以下の例に見られるよ

うに多数の意味用法がある。⁴

- (11) a. 夏休みはおばあちゃんの家で過ごした。(場所) ①
b. 桜島大根は世界で一番大きな大根だ。(抽象的な場・範囲) ②
c. 警察で犯人を調べている。③動作主体
d. 箸でスパゲッティを食べる。(道具) / 自転車で学校に通う。(手段) ④
e. この靴は革でできている。(材料) ⑤
f. 暑さで川の水が干上がった。(原因) ⑥
g. 雨で試合の延期が決まった。(理由) ⑦
h. 試験の結果で判断する。(根拠) ⑧
i. 後 1 分で昼休みが終わる。(期間) ⑨

このようにデには様々な用法があるが、同じデ形式で表現するための動機となるような、これらの用法に共通する点が外部世界に客観的に存在する訳ではない。これもやはり人間の解釈の結果である。紙幅の関係から全て取り上げることはできないが、例えば、デの最も基本的で中心的な用法（プロトタイプ）は「場所」だとされているが、「抽象的な場や範囲」は、境界を持った範囲の中で物理的、心理的活動が行われるという見方をすることで具体的な場所と関連付けられる。この範囲が時間という領域に転用されると「期間」の用法となる。また、場所はそこで行われる活動や出来事を成立させる支えとなるもので、道具に目的の行為を成立させる支えとしての役割を見いだすと、道具用法と場所用法との繋がりが見えてくる。「動作主体」については、行為が行われる場所とその行為主という繋がりに注目すると場所から動作主体へメトニミー的に指示がずれるメカニズムで繋がっていく。⁵

助詞デの様々な用法は人間の把握の仕方によってプロトタイプの用法を中心に繋がり、全体としてデという助詞を体系付ける。これは神経ネットワークのように、図2のようなネットワーク構造を成して脳に蓄積されるものと考えられる。

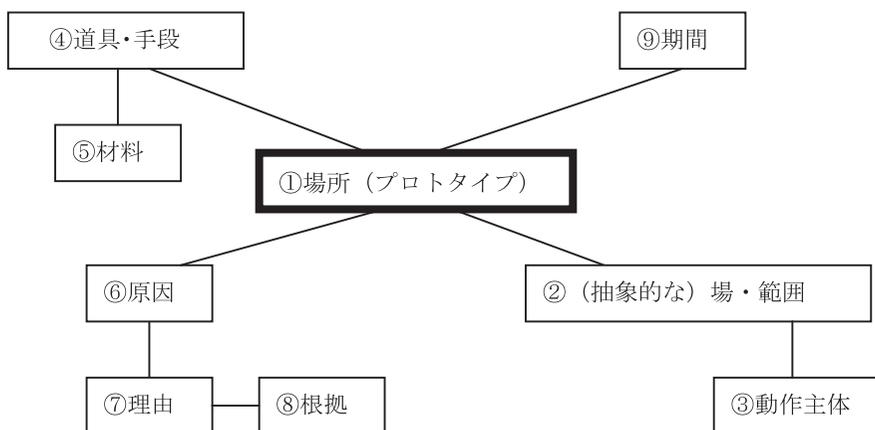


図2：助詞デの意味用法のネットワーク

以上、本節では、認知言語学の言語観に基づいて、ことばの特性について述べてきた。次節では、認知言語学の言語研究の成果が失語症研究に生かされる可能性について考えてみることにする。

3. 失語症研究への認知言語学の果たす役割

従来、失語症研究や失語症者の言語訓練に携わる言語聴覚士は教育学、医療福祉系、神経心理学等の領域出身者が多く、文学部系、特に言語学系の出身者が少なく、ことばの仕組みそのものを研究する言語学の知見が生かされにくい状況にある。例えあったとしても、言語学からの失語症研究への関与は、これまで生成文法という言語理論からのアプローチが主であった。しかしながら、言語研究においても失語症研究においても統語構造重視の生成文法的手法では限界がある。意味や、人間の認知過程、心理的側面も組み込んだ認知言語学は今後の失語症研究の進展に寄与する大きな可能性を秘めている。そこで、本節では、認知言語学の研究成果が失語症研究にどう貢献できるのか、その可能性について雑感を述べてみようと思う。

まず、比喩研究であるが、比喩は単なる修辭的な表現ではなく、既存の表現を元にして新たな表現を作り出す言語の創造的側面を支える重要なメカニズムである。2節でも見たように、比喩は、比喩とは感じにくい文字通りのような表現を含め日常言語のかなりの部分を占める (cf. Lakoff & Johnson 1980)。よって、比

喩研究の進展は、健常者の言語システムのみならず失語症者の“壊れた”言語システムの解明にも貢献できるものと思われる。



喩について報告する文学部
三年生 西川福喜子さん

喩の理解には、左脳と右脳両方が必要であり、言語中枢がない側の脳を損傷した場合には、喩としては理解できず、文字通りの意味にしか解釈できない場合があると言われている（山鳥・辻2006）。結果として文の十全な理解がなされないということになる。しかしながら、この時によく出される例は喩性の高いタイプであり、果たして喩とは感じにくいタイプに対しても同じことが言えるのかは調べてみる必要がある。脳損傷が同じタイプの人でも、喩性の程度の違いによって理解度が異なるのか、違うのであれば、元は同じ喩のメカニズムに基づいていても脳内処理が異なる形でなされているのか、多いに関心のある問題であり、認知言語学の喩研究の成果が生かされる研究領域と言えよう。

また、失語症の症状の一つに、意図した語とは異なった語が誤って出現する「錯誤」という現象がある。例えば「みかん」を「りんご」と言ったり、「机」を「椅子」と言ったりする場合で、意味の上で何らかの関係があることが多いようである。「みかん」の例は果物という同一のカテゴリーのメンバー間での錯誤である。また、「机」の例では、「机」と「椅子」が通常空間的にも近接し、機能的にも密接な関係にあるものである。この背後には2節の喩の所で見た、近接関係にあるものの中で指示がずれるというメトニミーのシステムが存在すると言える。認知言語学では、2節で見た助詞デに限らず、ことばを様々なカテゴリー関係から成るネットワークとして捉えるが、ネットワークとしての言語システムの解明はこのような錯誤に対して何らかの示唆を与えることができるかもしれない。

助詞デの分析のところで見たように、ことばはプロトタイプのメンバーを中心に様々な用法から成るネットワークを成している（プロトタイプカテゴリー）。プロトタイプのメンバーは周辺のメンバーに比べ、



助詞について報告する文学部
三年生 石山友之さん

具体性が高く、一般的に子供の習得も早く、使用頻度が高い。このようなプロトタイプカテゴリーが失語症者のことばの産出・理解にどう影響するのか、言語訓練による回復の順序に影響はないのかなどはとても興味深い問題であり、このような研究により、失語症研究の進展や言語訓練の方法の開発に寄与できる可能性がある。

以上のような観点に基づき、言語聴覚士の方の協力を頂いて文学部の学生（赤島八生、石山友之、尾辻由季子、片島志乃、田川加央理、中村英美、西川福喜子、宮川典子、柳川裕美）と共に熊本県内医療施設13カ所の失語症者の言語理解度の調査を行ってきた。今回のフォーラムでは、第一回目の調査に基づく途中経過報告が行われた。まず、助詞調査グループからは、失語症者の助詞の種類による正答率の差や、デの用法間での正答率の差について調べた結果の報告があり、続いて、比喩調査グループから、比喩表現における失語症者の理解力の調査および、典型的な比喩表現と、一見比喩とは分からないような比喩表現との理解度の差の調査報告が行われた。また、今回は、漢字の理解についても調査を行い、四字熟語調査グループから、四字熟語の二字ずつに二分した問題と四字のままの問題の理解度の比較、四字熟語理解における文脈の影響について報告がなされた。今回の調査で、それぞれ、一定の成果は上がったものの、収集したデータの数の問題や、失語症者に対する効果的なデータの提示の仕方などまだまだ検討すべき点があり、今後言語聴覚士の方と連携しながら、継続的に調査していくことで、失語症研究への関わり方の方向性がより見えてくるものと思われる。

4. おわりに

現在の失語症研究において、認知言語学からのアプローチはまだほとんど見られないのが実情である。今後認知言語学と失語症研究が連携して研究することで、失語症のメカニズムのさらなる解明や体系的な言語訓練の方法の開発が望まれる。

参考文献

- 大津・波多野編著 2004『認知科学への招待』研究社
- 行場・箱田 2000『知性と感性の心理』福村出版
- 久保田正人 2007『ことばは壊れないー失語症の言語学』開拓社
- 小藪真知子 2004『失語症 そして笑顔の明日へ』熊日出版

- 瀬戸賢一 2005 『よくわかる比喩』 研究社
- 萩原裕子 1998 『脳にいだむ言語学』 岩波書店
- 福島和子 2007 『脳はおしゃべりが好き』 真興交易（株） 医書出版部
- 森山新 2005 『認知言語学視点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程』 平成14～16年度科学研究費補助金研究報告書
- 山鳥・辻 2006 『心とことばの脳科学』 大修館書店
- 山梨正明 2000 『認知言語学原理』 くろしお出版
- Jancke, D. et al. 2004. “Imaging Cortical Correlates of Illusion in Early Visual Cortex,” *Nature* 428, 423-426.
- Lakoff G. & M. Johnson, 1980. *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Langacker, R. (1987/1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1/2, Stanford University Press, Stanford.

-
- 1 専門的には「スキヤニング」や「主観的輪郭」といった認知プロセスが関わる。
 - 2 実際に動きのある事象を表現した時と、動きのない事象を表現した時とで、事象関連電位における脳波測定の実験で検証する必要がある。
 - 3 「手を貸す」は手そのものの代わりに、手を道具として使う行為（手伝う）を表すと解釈することも可能である。その場合は、道具である「手」とそれを使った「行為」との間に見られる、「道具」と「プロセス」という近接関係間の指示のずれということになる。
 - 4 これ以外にもデの用法はあるが、ここでは議論の煩雑さを避けるため割愛する。
 - 5 デの用法間の繋がりや図2のネットワーク構造については、森山（2005）を参考にした。

日本語教育と失語症治療

ーことば、ことだま、たましいのひびきあいー

馬場良二（日本語教育）

日本語教育と失語症治療

一口に失語症と言っても、症状にはいろいろあるようで、話せるけれど聞いて理解できないだとか、本人は普通に話しているつもりなのだが理解できる発話になっていないだとか、単純ではありません。何年か前、名古屋での学会に行ったとき、交通事故で脳に損傷をうけ漢字が読めなくなった青年についての発表を聞きました。漢字が読めなくなって詳細な検査を受け、間違いなく漢字の処理をつかさどっている部位が機能なくなっていることが確認されました。ところが、数年後担当医師の名札の漢字を読んだそうです。再検査をしましたが、損傷をうけた部位が再生したわけではありません。脳のほかの部位が漢字の処理をするようになったのです。成人になってから漢字を処理する脳の部位が機能しなくなった人であっても、やり方次第では脳のほかの部位が漢字の情報処理をするようになる、ということです。ということは、漢字にふれずに成人になった非漢字圏の日本語学習者であっても、やり方次第では日本人と同じような方法で漢字情報を処理できるようになる、あるいは、すでにそうしている、ということになります。

このときから、失語症に対する治療法に非常に強く語学教育的な興味を持つようになりました。

日本語教授法の対象である日本語学習者も、言語聴覚療法の対象である失語症患者も、知能、人格、感情に問題はありません。困難なのは言語活動だけです。外国人が日本語を話せないのも、失語症患者がうまくできないのも、病気ではなく個人の特性なのであり、**失語症患者の置かれた状況は日本語学習者とぴったり**



かさなります。

日本語学習者が成人の場合、第1言語であるそれぞれの母語はすでにできあがっており、不完全なのは学習言語の日本語です。一方、失語症患者は母語である日本語自体が不完全となっています。第2言語を学習することと母語を治療することとの違いはありますが、どちらにしてもある個人による日本語の運用、操作が問題となっており、日本語教育の対象であることは間違いありません。

小菌先生がおっしゃるには、失語症の患者で、うまく話せない人であっても、自然の流れではことばがでてくるそうです。ところが、ひとつの語を取り出して、これは何だと聞かれるとわからない。場面に依存しているのです。

話しかける人のほうが患者のフィールドに入り、主体的に話してもらおうとスラッシュと出てくるそうです。たとえば、株式のディーラーの場合、経済紙をスラスラ読み、株式、金融関係の専門用語をまじえて詳しく説明できるそうです。興味のあることや得意な分野について話してもらおうと、うまく話せます。感情が記憶を刺激するのでしょうか、それとも、おもしろいと感じるときは言語の検索能力が活性化されるのでしょうか。

日本語教育でも同じです。**学習者の好きなこと、興味のあること、得意な分野**だと、理解もできるし発話もできます。また、文法や単語など、新しい項目も身につけやすくなります。むかし教えた台湾からの学生は少女漫画が好きで、日本へ来たときにはすでに分厚い漫画をたいへんはやさで読みこなしていました。日本語教育から見るとむずかしいと思われる微妙なニュアンスまで感じ取るので

学習者のフィールドにはいるという意味では、教師の知らないことを学習者に教えてもらう、というやり方も有効です。教師は、日本語は知っているが話題になっていることに関する知識は乏しい、そして、学習者は知識豊富だが日本語での言い方はよく知らない。教師が一方向的に教えるのでなく、発話の内容は学習者が提供し、それを教師が日本語にのせてやる、といったやり方です。学習者に興味を持ち、積極的に知りたいと思い、学習者の言うことを聞く、そうすることによって信頼がつかわれます。

人と人がコミュニケーションによってつながるためには**何とんでも人間的な信頼**が必要です。日本語教育も失語症治療も、日本語で学習者とコミュニケー

ションをとり、そのことによって学習者の日本語力をひきだす、言語教育なのです。

若い人

小菌先生は、ことばを大切にしてほしいと、おっしゃいます。

失語症の患者さんには閉じこもらないで外に出てほしい、そのご家族には、何もできないのではない、何でもわかるんだ、できるんだ、ということに気づいてほしい、そして、世の中には、**失語症の存在を知ってほしい**、と。

私は、1995年に大学の近くにある手話教室にかよいました。語学教師であるからには、語学を学習しなくてはいけない。以前から興味があった手話を勉強しよう、と思ったからです。

その教室で、ビデオを見る機会がありました。現在、東大の准教授をしている全盲で聾のかたの講演の様子でした。この方は、18歳で聾になり、講演は手話をまじえた口頭でした。畳敷きの広間のような部屋で、耳の聞こえるものは声を、手話のわかるものは講演者の手話を、手話のわからない人はとなりについている速記者の書く文字を目でおみます。聾で盲の人は、ボランティアの手話の手に直接触れ、理解していました。思い思いの姿勢と方法で、それぞれがコミュニケーションをとっています。

そのとき、思いました。**人間はコミュニケーションしなくちゃいけない**。できるのではなくて、ねばならない。どんな方法であれ。

私たち人間にとってことばはことだまであり、**コミュニケーションをとるということはたましいをひびかせあうこと、生きること**なんだとわかりました。

失語症患者とその家族のための本を読みました。その中に、散歩が好きなのは自然とコミュニケーションするのが好きだからだ、とありました。失語症患者は、そして、人間は好きなことをしなくてははいけません。

ランナーは走ることによって自分を表現することができます。20年以上前に教えた留学生は、日本語が上手になりませんでした。ある日、日本語学校の文化祭のために看板を書いてくれました。残業で遅くなって教室をのぞくと、彼女がまだ作業をしています。筆で書いた文字を切り抜き、看板に貼り付けていました。

墨で書いたままだと、紙がしわになってしまうからです。書も、水彩も、油も、水墨も、なんでもやると言います。そのとき、わかりました。だから、日本語は上達しない。この人は、書くことによって自分を表現できるんだ。ことばでなくても、他とコミュニケーションをとることができるんだ。

ビデオを見た日から私は生まれ変わりました。話しかけたいときには誰にでも話しかけられるようになりました。相手にとって迷惑かもしれない、と思う必要がないことに気がついたのです。話したいことはいつでも話せるようになりました。人間はコミュニケーションをとらなくてはいけない、ということを知ったからです。

小菌先生は心配しています。若い人たちがコミュニケーションできなくなっている。先生は、自分も何かできるんじゃないかと思っいらっしゃいます。来てほしいと思っています。コミュニケーション、ことばのことで悩んでいる人は、失語症でなくても、たずねてみてください。

私の授業が役に立ってほしい

文学部では、毎年11月ごろに卒業生を招いて、在校生との交流会を催しています。去年も、新旧4名の卒業生が来て、就職や仕事について話してくれました。質問の時間に、「もっと大学で勉強しておけばよかったとみなさんおっしゃるが、大学での勉強は本当に役に立っているのか」と聞きました。教師の本音です。日本語日本文学科の演習や卒業論文は、企画書の作成に、そして、反論してくる顧客や他部署の同僚をねじ伏せる話法に役に立っています。それは知っているし、想像にかたくありません。でも、日本語教育関係の授業が役に立つのか不安な面がありました。

特別支援学校に勤務している卒業生は、「役に立ちますよお！！」とあきれたような顔でこたえてくれました。「先生の授業のビデオ、まさに毎日が直接法ですよ」というのです。「直接法」というのは、語学教育での専門用語で、学習者の母語を使わず、学習言語だけで授業を進めるやり方のことです。生徒の国籍、使用言語にかかわらず、日本語で授業を進めて日本語を教えます。学校では日本語を使ってコミュニケーションをとるだけではなく、身振り手振りが大いに必要

だ、ということのようでした。そのビデオは私の授業ではなく、外から来ていただいている先生の授業で見たはずですし、「直接法」というのは、身振り手振りで意思を伝えることではありません。ですが、あのビデオを見たことが、また、その授業を受けたことが彼の今の仕事に直接的に役に立っていることは確かなようで、私にとってはとてもうれしい交流会となりました。

日赤の事務に採用された卒業生もいます。日赤には、ほぼ常時海外からの研修生がいて、その日本語の面倒は事務職員がしているようです。彼女は、就職の際の面接のとき自分が日本語教師養成課程で勉強したことをアピールした、だから、採用されたのかもしれない、と言っていました。また、今年東京に本社のあるソフト制作会社に就職の決まった学生は、面接官は一人だけで、日本語教師とは何か、タイへ教育実習に行ったようだがタイはどうだった、タイで何をした、という話で終始したそうです。

どのような形であれ、私の授業は卒業後の卒業生たちの仕事に、そして、彼らの人生に役に立っているのです。

すでに言語聴覚士を養成する専門学校に進学した卒業生がいます。そうでなくても、日本語教育の知識と実践は失語症治療に役に立つはずです。この4月からは、文学部の大学院に現職の言語聴覚士が2名はってきます。**失語症治療の分野から、そして、日本語教育の分野から互いに刺激しあって、お互いの発展に寄与していきたいと思います。**